

菅江真澄と徐福

池上 正治

はじめに いわゆる有名とされるものが、じつはそれほど価値がないこともある。その反対に、無名ないし低い知名度のものが、驚くほど大きな価値をもつことがある。
菅江真澄（すがえ・ますみ）のことは、たぶん多くの人が知らないだろう。だが、彼の足跡は北海道をふくむ東日本の各地におよび、その作品（紀行文・和歌・絵）は膨大である。とりわけ、真澄の筆になる「徐福の塚」の描写とその絵（カラー）は、日本の徐福研究にとって、新たな、輝かしい1頁を開いたといえるだろう。

あるPR誌の記事から

よく目にするPR誌の『チャイナビュー』（イスクラ産業、No.134、2010年1月）に特集「徐福の足跡をたどる」があった。その第7頁の小さな写真「秋田県男鹿（おが）市」に注目した。同市には「徐福の塚」があるという。ときに徐福がらみの話で登場する男鹿であるが、これまでは「物証」というものがなかった。

調査なければ、発言なし

仕事から、ものごとを調べるのは、嫌いではなく、むしろ楽しい。未知のものへ接近するのは、ある種の快感ですらある。例によって、学術サイドと観光サイドの2方面にあたると、中心人物として、同じ名前すなわち山本次夫（やまもと・つぎお）さんが出てきた。電話をして、6月3日（2010年）の訪問を約す。

2回目の男鹿では、講演を

初回で、山本さんと意気投合。しかも、翌月に予定されていた「徐福塚復元5周年」に参加し、アジアの徐福について講演してくれるようにとの依頼。それを快諾、7月31日、再び男鹿へ。徐福フォーラムは盛況だった。また、徐福上陸の地や真澄が歩いた道を案内してもらおう。帰路、念願の鳥海登山をはたす。

3回目の男鹿は、徐福仲間と

3回目は徐福仲間を連れてきます、という約束どおり、昨年（2013）5月27日、神奈川徐福研究会の田島会長ら8名で、男鹿へ。菅江真澄研究会の天野荘平会長ら地元の人たちと座参会をもち、有意義な交流に。雄山閣のナマハゲ温泉、鯛づくしは、忘れがたい体験。

わが書庫にじつは・・

灯台もと暗し、という。1回目の男鹿からもどり、自分の書庫をみていると、『菅江真澄遊覧記』（全5巻、平凡社・東洋文庫、1965～1968）があった。さっそく読破、真澄の行動力と記録精神に敬服。ついでに、未来社の『菅江真澄全集』（12巻＋別巻、1971～1981）を、都立の中央図書館で閲覧。真澄が記述し描写した徐福および徐福塚は「男鹿の秋風」（文化元 1804 年）を確認すれば・・。

さらに探求、絵図を入手

知るほどに真澄（宝暦4＝1754～1829＝文政12）にたいする関心が深まる。活字本としては一番古い『菅江真澄集』（全6巻、秋田叢書別集、昭和5年～8年。デジタル化）を、国会図書館で閲覧。自分で買える範囲は『菅江真澄民俗図会』（全3巻、岩崎美術社、1989）『菅江真澄の旅と日記』（内田武志、未来社、1996）『菅江真澄』（宮本常一、未来社、1980）『菅江真澄と旅する』（安永稔和、平凡社、2011）など。

男鹿には濃厚な中国文化が

真澄の記録によれば、男鹿の山には寺や廟があった。当時、長楽寺の食堂（じきどう）は蓮池に差しだすように作られ、廟には漢の武帝を祭っていたという。南麓の赤神神社には、武帝と西王母を画いた社宝の絵があり、今回、特別に拝観を許された。徐福の塚が復元されたのは、長楽寺の池の畔である。また、武帝の和平使節として派遣され、匈奴に19年囚われていた蘇武（そぶ）が祭られていたという。

地震を記録していた真澄

3・11（2011 年）は記憶に新しいが、日本はもとより「地震大国」である。真澄が男鹿にいた文化7年（1810）8月、寒風山ちかくで直下型の「男鹿大地震」があり、震源ちかくの場所では、全壊 950 棟、半壊 345 棟、全地域での死者は163人にのぼる。その詳細が「男鹿の寒風」にある。

真澄の記録するナマハゲ

なんともユニークな民間行事のナマハゲ（男鹿市重要無形文化財）ではある。一見、いかにも粗暴な振舞いをするナマハゲだが、その話には教育的な要素もあり、興味ぶかい。その最古の記録が、真澄の「男鹿の寒風」にあり、やはり真澄の筆になる絵とともに、男鹿にとり「恩義、浅からぬ存在」ではある。

おわりに 江戸期の後半、三河（愛知・岡崎）に生まれた菅江真澄は、30歳の時、東へと漂泊の旅にでて、秋田で没する（享年76歳）まで、郷里に帰ることは無かった。真澄が遺した文章・和歌・絵画は、当時の日本を知るうえで貴重な史料であり、徐福塚を含む中国の影響については、今後一層の解明がなされることを期待したい。